



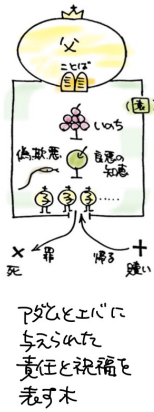
# 主の祈り #5 エデンの園のふたつの木

## エデンの園のふたつの木

2017.12.6

エバ  
いのちの木

エト  
善悪の知識の木



1. 御名が聖とされるように

祭司 (聖を守る)

種族的繁栄 死を恐れずおこなう

2. 御国が来ますように 3. 御心が天で、地でも

王 (良人・悪者をさばく)

政治的平和 主を恐れぬ知恵

4. 日毎のパンを

生き子 - 御腹を養われる

生まれる (4代まで)

実・女・7日目・調和

エバ  
生めよ、増えよ

5. 罪を赦したまえ 6. 試みにあわせず 悪者から救い出さず

知子 (いのちの木への道) - みにこはを

ひとつにちる (兄弟が)

種・男・60歳・分ける

エバ  
地を従えよ、支配せよ



エデンの園のふたつの木、「いのちの木」と「善悪の知識の木」。このふたつの木は、神様が人間に与えるという宝物のふたつだということと言えます。ですから、主の祈り、神様が私たちに与えようとしている報い、その報いと、いのちの木、善悪の知識の木というものを一緒に見ることは、妥当であろうということなのです。

園の中央にいのちの木があって、その隣に善悪の知識の木があるということですが、主の祈り(1)御名が聖とされるように、これが、いのちのほうです。(2)御国が来ますように、(3)御心が天で、地でも、これが、善悪の知識の木。(4)日毎のパンを与えてください、これが、いのちの木。(5)罪を赦し給え、(6)試みにあわせないで悪者から救ってください、これが、善悪の知識の木。1,2,3,4...主の祈りを4つに分けた時の前半2つが、いのちの木(1)と善悪の知識の木(2)(3)。後半2つに分けたものが、いのち(4)と善悪の知識の木(5)(6)というように並行しているものと考えます。

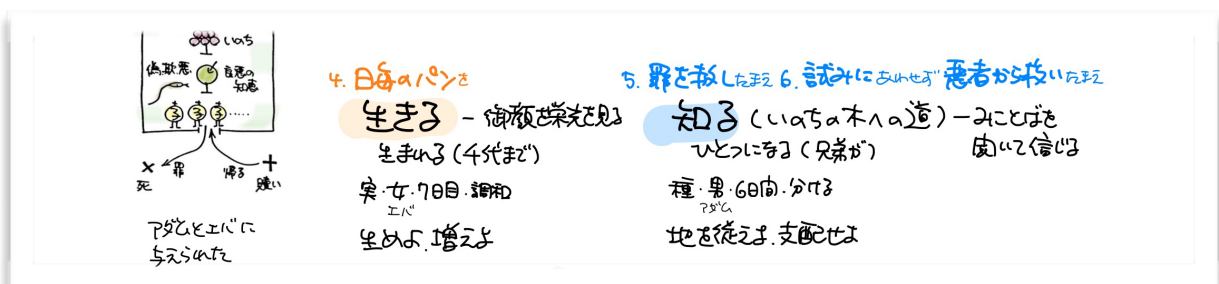


いのちの木、御名が聖とされるようにということは、こちらの最初の2つの課題です。アダム、人間に与えられた責任、御名が聖とされるように、祭司としての責任ということが言えます。聖さを守る、死や汚れから清める、死から離れる、汚れを洗い流す。水で洗ったり、いけにえで洗ったりします。その祭司としての責任。

それと、御国が来ますようにのは、王としての責任。王は何をする人なのかというと、善人と悪人を裁く、正しい裁き、あわれみの裁きをして、悪者を追い出して善人を守るという責任、裁き主ですね。これが、王様の責任ですので、ソロモンの知恵、ソロモンが王様になるときに「この民をさばく知恵を与えてください。」という願いをしました。その願いは、王様にとってふさわしい願いだということです。善と悪を知るのは、主を恐れて、善と悪をさばく、主を恐れることがまず善悪を知ることの出だし、初めです。この知恵のある人は、シャロームをもたらす王様になります。シャロームをもたらす王様によって平和が来ると繁栄します。豊かに豊かに、神様の栄光を仰ぎ見ることができます。神様の御名の栄光を見ることができます。

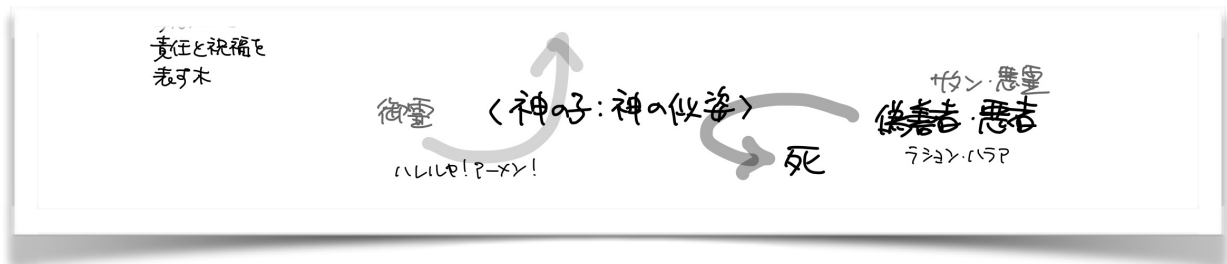
こちら(2御国、3御心)は、政治的に平和である。こちら(1御名)は、経済的繁栄していることということで、現代のニュースも政治的なニュース、経済的なニュースというところに一番力が入られているのもよくわかります。神様は私たちを王として、祭司として任命しましたので、その戦いがずっとあるということは、現代においても続いています。

この責任を果たすならば祝福が与えられます。その報いが与えられるところですけど、善悪を知ることが、いのちへの道です。みことばを聞いて神様を信じるならば、みことばを聞いて神様を知るならば、それは生きるということ。神様と民が一つになる(知るといことは一つになるということ)、知るならば生きる、生まれるというつながりになります。



こちら(5,6)は善と悪、悪者を裁いて自分たちを正しく保つということです。自分の中の問題を取り扱う。外側からの問題を取り扱う。それによって、善人になるということです。善であり続けるということをするならば、生きる。生きるというときに、(ここにエデンの園の絵があります)真ん中にふたつの木があって、神様の顔、目と耳がここにあつて、ことばがあります。この神様の栄光の顔を仰ぎ見る。その御前で歩むことができるようになる。これが生きるということです。

生きるならば、また次に子どもを産み続ける。千代まで生まれるということもこの生きるという中に含まれている。もしくは、生きると言っているものがいちばんあらわれるのは、「生めよ、増えよ」ということです。生めよ増えよ、地を従えよというアダムに与えられた命令はここにあらわれています。6日間働いて、種である男が分ける。善と悪を分ける。正しい歩みをするならば、実であるいのち、(エバのほうですね)が、7日目にその調和があらわれるというように、聖なる者のいのちの栄光があらわされる。種と実、男と女、6日間と7日目、分けることと調和していることということも、この善悪をさばくほうと、いのちと一致のほうが強調されているものの違いだということが言えると思います。



その善悪の知識の木といのちの木が与えられた時に、最初に試みる者が近づいて来ました。試みる者は、偽善者、悪者、サタン、悪霊、偽り者です。みことばを聞いて信じることを疑わせる。その悪者は、ラシオン・ハラアです。悪の舌で「本当なのか」ということを試すわけです。

その試されているいのちの木と善悪の知識の木の祝福を得る相続する者は、神の子です。別の言い方でいうと、神様の似姿です。神様に似ている者として作られた、その神の子。神様の似姿である神の子に対して、偽りと悪によって攻撃をして、死ぬほうに引きずり降ろそうとしている。死ぬほうにというのは、神様との関係を断ち切ろうとしているということです。

それに対して御霊が与えられると、(もうすでに残念ながらアダムは罪を犯して追い出されてしまったから、今度帰るということですね)贖われて御霊によってハレルヤ、アーメンというように、ラシオン・ハラアに対して感謝と賛美ということを口に満たされる者に変えられる。それで神の子にされる。神の似姿になる。神様の似姿になるということは、この主の祈りの課題がすべて聞かれているという状態であるということも言えます。

別の言い方で言う、神の子であること、神の似姿であること、善悪の知恵があって、永遠に生きる者とされていること。これは、すべて同じことを別の言い方で言っている。御霊の実を結んでいるということも言えます。

永遠のいのちの祝福は御霊で、善悪の知識は神様のことばである。ことばによって道を知って、御霊に満たされて生きるということも言えますので、最初のふたつの神様が与えると言ったすべて与えますと言った中での特別なふたつです。このふたつが主の祈りの元になっている。主の祈りを見るときに、このふたつが与えられるのだということを思い出す。そして、黙示録のところで、新しい天と地、新しい都の中の中央にもいのちの木があるというところまで、このテーマが続いていくということだと思います。